

令和6年3月
編集・発行
大分市自然環境調査検討委員会
大分市環境部環境対策課
大分市荷揚町2番31号
電話：097-537-5758



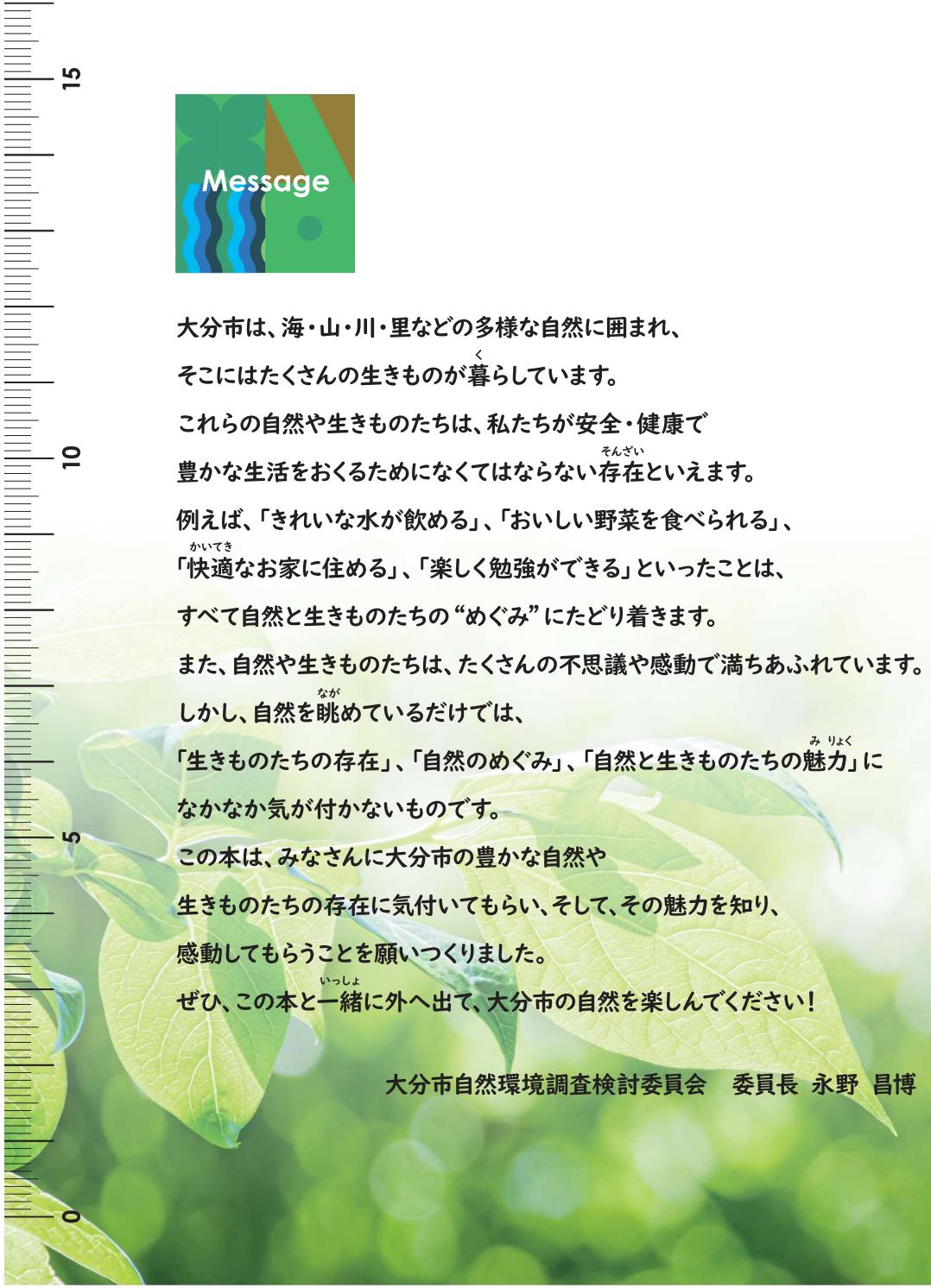
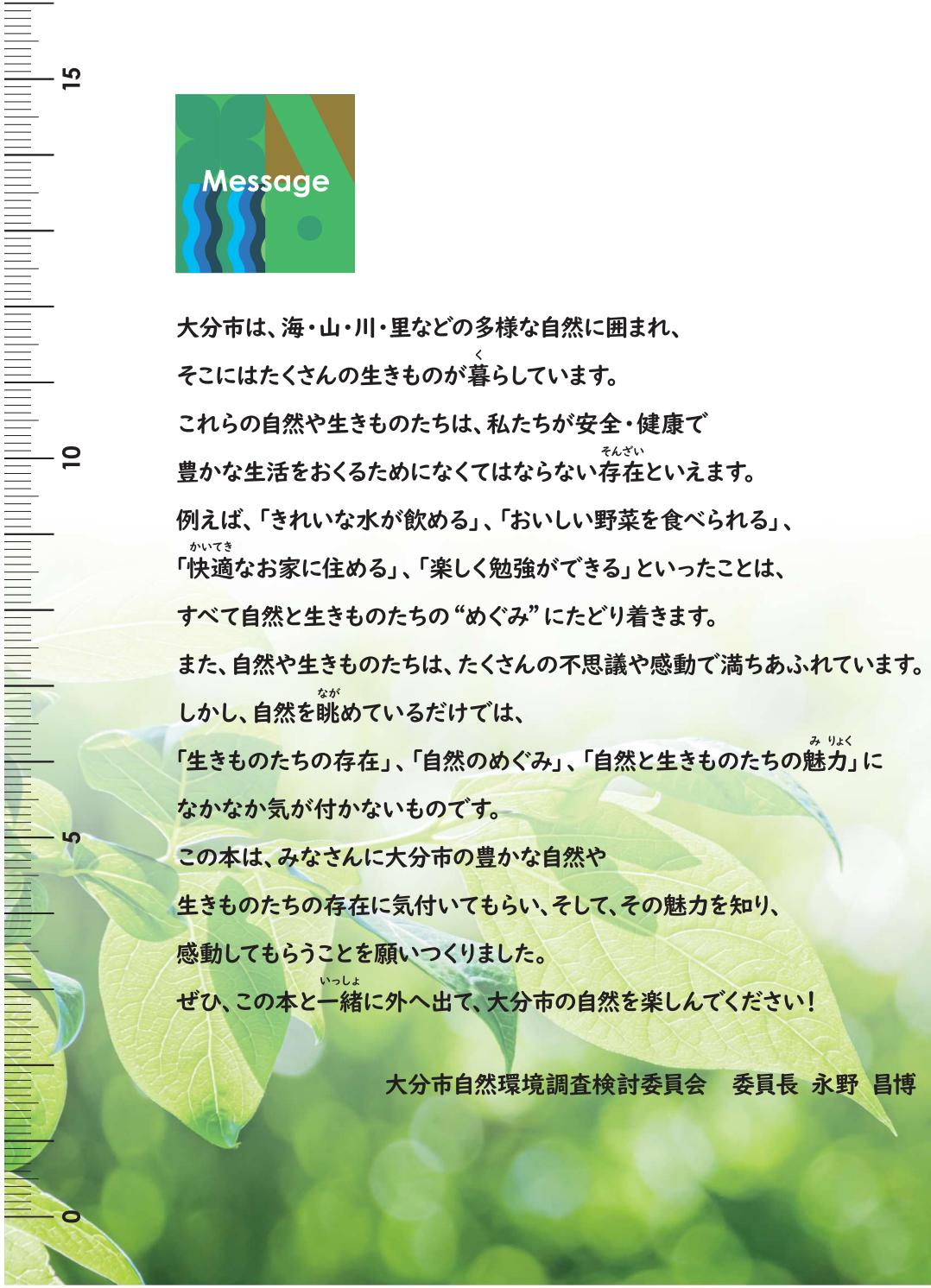


Contents

この本の使い方	P03
自然観察をするまえに	P04
大分市の自然環境マップ	P05
OITA自然観察ガイド【フィールドストーリー/12コース】	P07
植物	P19
昆虫	P23
哺乳類	P27
鳥類	P29
爬虫類	P31
両生類	P32
魚類	P33
大型水生甲殻類	P35
陸・淡水・汽水産貝類	P36
岩石	P37
特定外来生物	P39
作成・編集について	P41

大分市は、海・山・川・里などの多様な自然に囲まれ、そこにはたくさんの生きものが暮らしています。これらの自然や生きものたちは、私たちが安全・健康で豊かな生活をおくるためになくてはならない存在といえます。例えば、「きれいな水が飲める」、「おいしい野菜を食べられる」、「快適なお家に住める」、「楽しく勉強ができる」といったことは、すべて自然と生きものたちの“めぐみ”にたどり着きます。また、自然や生きものたちは、たくさんの不思議や感動で満ちあふれています。しかし、自然を眺めているだけでは、「生きものたちの存在」、「自然のめぐみ」、「自然と生きものたちの魅力」になかなか気が付かないものです。この本は、みなさんに大分市の豊かな自然や生きものたちの存在に気付いてもらい、そして、その魅力を知り、感動してもらうことを願いつくりました。ぜひ、この本と一緒に外へ出て、大分市の自然を楽しんでください!

大分市自然環境調査検討委員会 委員長 永野 昌博



Message

この本の使い方

この本は、あなたに
「大分市の豊かな自然」を「身近に」感じてもらうために作りました。
身近な自然の中にも、気づいていない不思議や魅力がたくさんあります。
読みものとして、あるいは実際に自然の中に持って行き、観察の手引きとして、
いろいろな場面で利用してみてください。
一歩外へ出て、大分市の自然の豊かさを全身で味わってみましょう。

0 アオヤンマ
よくみられる時期:春~夏
体長:70mm

[生息場所] 川

生きものの名前（生息場所）
体長・見られる時期など

最初にこの本を手にしたときや
自然観察をするとき、次のようなマークをつけてみましょう。

- 名前など、しっかりと
知っている生きもの
- 見たことのある生きもの
- 野外に出て、
その生きものと出会ったとき

ヨシやガマなどの植物が繁茂（はんも）する明るい池で、青く美しい姿が見られます。最近は個体数が激減しています。

説明文

▼レッドリストのカテゴリー

絶滅 EX	種類ごとに絶滅のおそれの程度に応じて、 以下のとおりカテゴリー分けをして評価しています。
野生絶滅 EW	大分県ではすでに絶滅（ぜつめつ）した種
絶滅危惧 IA類 CR	人が飼育・栽培（さいばい）したものだけが生きている種
絶滅危惧 IB類 EN	近い将来（しょうらい）に絶滅の危険性（きけんせい）が極（きわ）めて高い種
絶滅危惧 II類 VU	IA類ほどではないが、近い将来に絶滅の危険性が高い種
準絶滅危惧 NT	絶滅の危険（きけん）が増えている種
情報不足 DD	現時点で絶滅の危険度は小さいが、 絶滅危惧（ぜつめつきぐ）になる可能性がある種
絶滅のおそれのある 地域個体群 LP	評価するための情報が足りない種
	地域的（ちいきてき）に孤立（こりつ）している個体群で、 絶滅のおそれが高い種

※大分県レッドデータブック2022を参照しています。

自然観察をするまえに

野外で自然観察をするときは、持ちものをしっかりと準備しましょう。

- 持ちもの
チェックリスト**
- CHECK / しよう!
- ぼうし
 - 長そでのうわぎ
 - 長ズボン
 - はきなれたくつ
 - 水分（水筒など）
 - 食料（弁当など）
 - タオル
 - ティッシュ
 - この本やノート
 - 筆記用具
 - ビニール袋
 - 救急セット
 - カメラ
 - 双眼鏡
 - 虫メガネ
 - ピンセット
 - 長ぐつ
 - 雨具（カッパや傘）
 - 虫取りあみ
 - 虫かご
 - 虫よけスプレー
- 12 21
はあつたほう
がよいもの

観察のコツ

- 花や木の実、葉っぱのにおいをよくかいでもらいましょう。
- 耳をすませて、虫の鳴き声、小鳥のさえずり、カエルの声などをきいてみましょう。
- 形、大きさ、色などをしっかり観察してみましょう。虫メガネやピンセットなどの道具があれば役に立ちます。
(太陽を虫メガネで絶対に見てはいけません。)

観察のマナー

- 自然をきずつけないようにしましょう。
- 火は使わないようにしましょう。
- 採集する前に、生きものをよく観察してみましょう。
- ゴミは全部持ち帰って、来たときよりも美しくしましょう。



大分市の自然環境マップ

大分川下流域 p11

1年間を通じて多くの鳥が生息しており、冬鳥のカモ類やカモメ類、夏鳥のオオヨシキリが見られます。

護国神社の森 p10

境内(けいだい)はアラカシなどの林が広がり、春はサクラなどの花、夏は昆虫採集、秋はドングリ拾いなど、四季の自然を楽しめます。

乙津川

ハママツナ・ハマサジなどの植物、トビムシ・ゴカイ・カニ・貝の仲間が多く生息しています。

大在干潟(ひがた) p9

干潟とは、河口付近で満潮(まんちょう)のときに水にひたされ、干潮(かんちょう)の時には陸上に現れる泥(どろ)や砂(すな)でできた浜(はま)のことをいいます。

柞原八幡宮の森 p12

柞原八幡宮(ゆすはらはちまんぐう)の森はイチイガシ・コジイ・イスノキなどの常緑広葉樹が生い茂(しげ)って、今も原生林の姿を保っています。

七瀬川自然公園 p15

せせらぎでは、カジカガエル・カマツカ・ゲンジボタル・カゲロウ類・トビケラ類などの水生動物が観察できます。

大分市

10km

佐賀関半島 p17

南岸にはハマモトやウバメガシなどが、北岸にはハマビワなどが見られます。黒ヶ浜(くろがはま)にはじゃもん岩の円礫(えんれき)が見られます。

七瀬川上流

豊かな自然河川にはツルヨシやネコヤナギなどが見られ、川にはカワムツ・タカハヤ・アカザなど、多くの魚類がすんでいます。

九六位山 p8

円通寺(えんつうじ)の参道には市の名木であるイチョウなどの大木が、キャンプ場には緑のじゅうたん状の草原が見られます。

高尾山自然公園 p7

コジイなどの常緑広葉樹林、冬に葉を落とすコナラなどの落葉広葉樹林など、自然の林の様子が見られます。

靈山 p13

駐車場から一周巡回できるコースがあります。寺のすぐ上の弁天(べんてん)池付近は、オオイタサンショウウオの生息地です。

河原内川 p16

一面にツルヨシ群落があり、ハグロトンボやハンミョウなどの昆虫類、川にはオイカワ・ドンコなどの魚が泳ぎます。

青少年の森 p14

県民の森の施設である展示館を起点として人工池周辺、キャンプ場周辺、丸塚(まるつか)広場周辺で自然散策(さんさく)ができます。

下判田の水田等

里山環境には、耕作水田や素掘(すぼ)り水路などの多様な環境があり、ドジョウやアカハライモリなど多くの生きものがすんでいます。



高尾山(たかおやま)自然公園は、大分市中央部北寄りの丘(おか)にあります。この丘に以前からあった森林に道をつくり、新たな植えこみをしてみんなの散策(さんさく)よい場所としています。

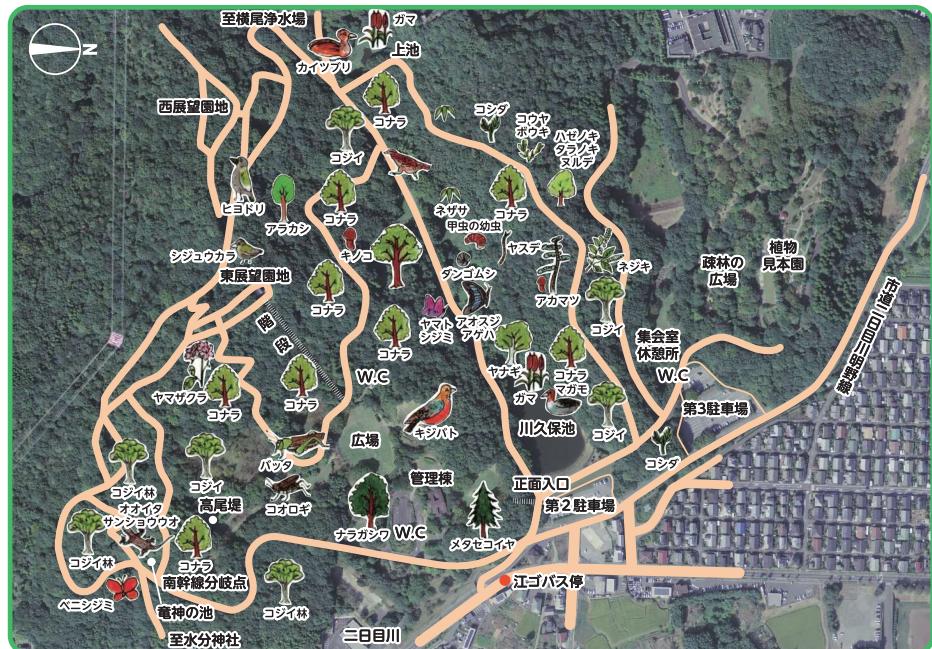
観察コースにそって歩くと、コジイのような常緑広葉樹(じょうりょくよこうようじゅ)の林、冬に葉を落とすコナラのような落葉広葉樹(らくようこうようじゅ)の林、これらの林にヒノキやスギなどを交えた林など

Field Story

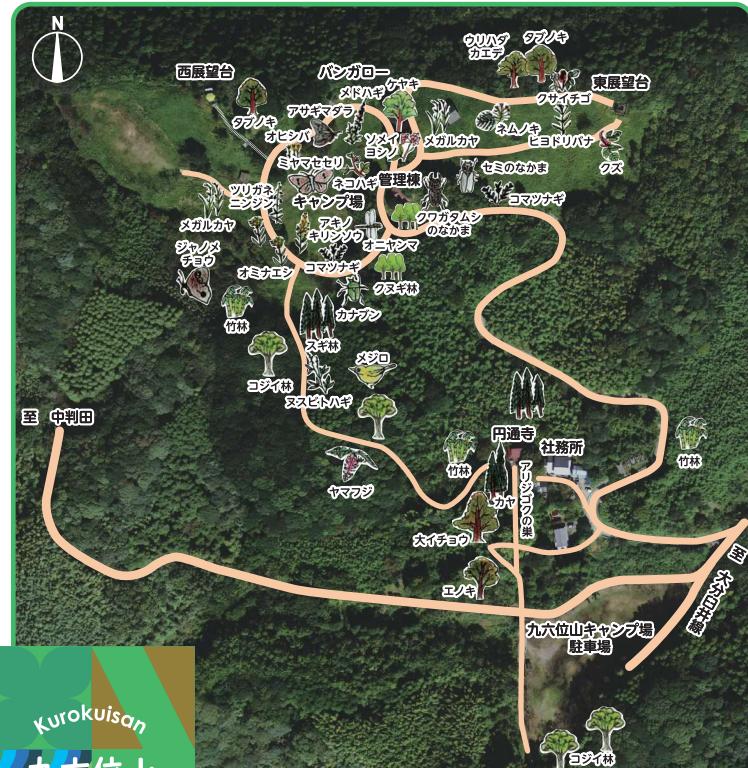
が見られます。

園内には、林の中の背(せ)の低い木や下草が切り取られて、自然の林の様子が見られない所もあります。しかし、それぞれの林にはそこに適した生物が生活しているので、こずえから地面まで気をつけて観察しましょう。

また、木の実(どんぐりなど)の違い(ちがい)、林の種類によるきのこの違い、季節による木の葉色の変化(紅葉(こうよう)など)、梅雨(つゆ)、真夏や秋の動物の種類や動きなどにも目を向けると、より楽しい自然観察ができるでしょう。



大分市では、豊かな自然が残り、さまざまな生きものを観察できるコースを「OITA自然観察ガイド」としてまとめています。



Field Story

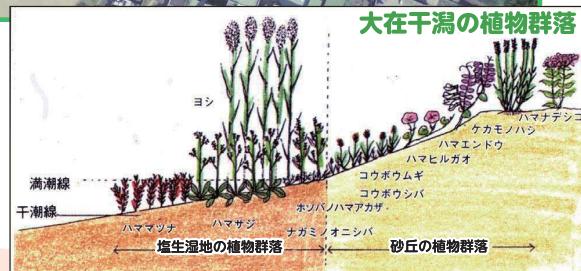
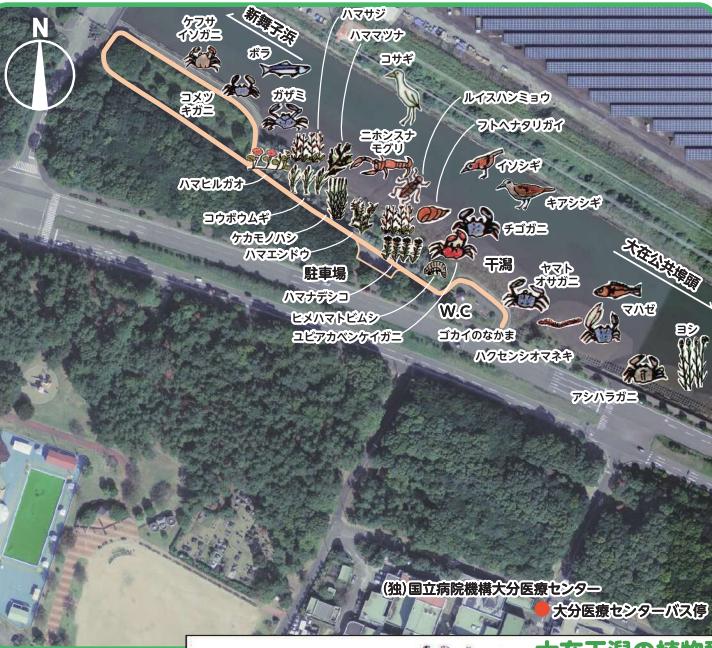
九六位山峰(くろくいさんとうげ)からサクラ並木(なみき)を登りつめると九六位駐車場(ちゅうしやじょう)につきます。駐車場の南側にある経塚遺跡(きょうづかいせき)は、シイの森で、森の中では、ウグイスやメジロなどの野鳥の鳴き声が一年中楽しめます。

駐車場の北側は、石段となっていて、円通寺(えんつうじ)の参道となっています。参道の左側には市の名木である

イチョウ・カヤなどの大木があります。

円通寺の西側は、散歩道となっていて、モウソウチク林やコジイ林の中を20分ほど歩くと九六位キャンプ場につきます。キャンプ場は緑のじゅうたん状の草原となっており、春から秋まで、それぞれ季節の野草の花を観察することができます。

また、チョウ・バッタ・トンボなどの昆虫類も多く、豊かな自然を楽しむことができます。



干潟（ひがた）とは、河口付近での満潮（まんちょう）のときには陸上に現れる泥（どろ）や砂（すな）でできた浜（はま）のことをいいます。干潟には、ほかの場所で見ることができないめずらしい植物や動物が生んでいます。最近、河口や海岸の工事のために、全国的に干潟の自然が失われていますが、大分市に残されている干潟には、今でも自然の動物や植物が生活しているのです。

植物ではハママツナ・ハマサジ・フクド・ナガミノオニシバなどが、環境のちがうところにそれぞれ群落（ぐんらく）をつくりっています。

このような植物や打ち上げられたゴミ・藻類（そうるい）などを食物として、トビムシ・ゴカイ・カニ・貝の仲間が多く生活しています。とくにカニ類の生活や行動の仕方はとても興味深いものがあります。

また、このような小動物を食べにたくさんのが鳥たちがやってきます。干潟は春と秋の渡り鳥の大好きな休憩（きゅうけい）場所でもあるのです。

護国神社（ごくくじんじゃ）は、大分市の市街地や臨海（りんかい）工業地帯をひと目で見わたすことができる高台にあります。

広い境内（けいだい）はアラカシやコナラの林におおわれ、春はブンゴウメやサクラの花、夏は昆虫採集、秋はドングリ拾い、冬は落ち葉を踏（ふ）んでの散歩など、四季を通して自然を楽しむことができます。参道は、緑につつまれて小鳥がさえずり、樹木（じゅもく）には名札が下がっています。池にはカルガモがすみつき、夏

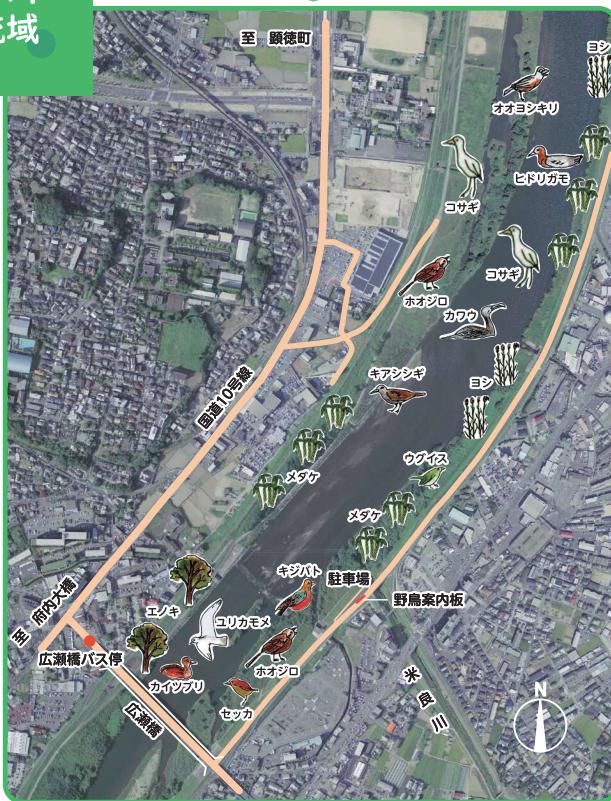
は甲羅干（こうらぼ）しをしているイシガメや牛に似た声で鳴くウシガエル（39ページ参照）がみられます。小川に沿（そ）ったスギ林の中にはシダ類が群生（ぐんせい）し、水辺にはセキショウがはえています。東の尾根（おね）の山道を登ると、初夏はコナラの新緑、スズランのような花がすずなりのネジキ、ヤマツツジの赤い花が人目をひきます。夏は、コナラやクヌギの樹液（じゅえき）にカブトムシやクワガタが集まります。秋から初冬はハゼノキやコナラの紅葉（こうよう）が美しく、ここには今も里山の風景が残っています。



Field Story

市民に親しまれている大分川の堤防(ていばう)上には、「自然とのふれあい」をと、野鳥案内板が5か所に立っています。探鳥(たんちょう)場所は案内板のある上下流域(りゅういき)が観察に適しています。

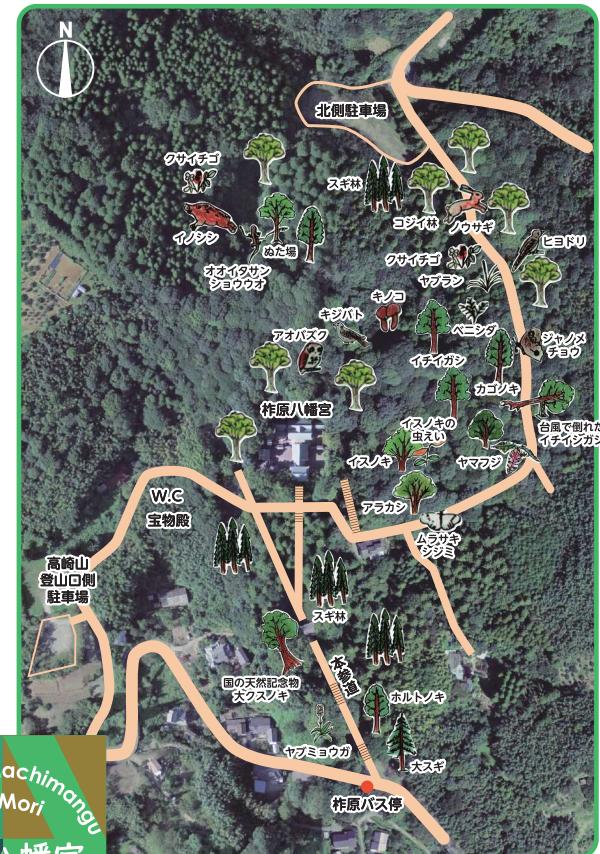
- ①舞鶴(まいづる)橋上流の左岸…カモ類やカモメ類が身近にみられます。
- ②米良(めら)川の合流点…水辺の鳥と山野の鳥が多くみられるので最も観察に適しています。
- ③大分刑務所の裏(うら)…七瀬川合流点付近が観察



に適しています。

- ④賀来(かく)川合流点…小さい中州(なかす)や瀬(せ)、淵(ふち)があっていろんな鳥がみられます。
- ⑤植田(わさだ)西中学校前のせき…自然環境がよく多くの鳥に出会えます。

年間をとおして多くの鳥が生息していますが、水辺の鳥を中心になります。探鳥時期としては冬鳥のカモ類やカモメ類などが飛来する10月から、夏鳥のオオヨシキリなどが飛来する5月までの間がよいでしょう。シギ・チドリ類は春と秋の渡(わた)りの時期によくみられます。



Field Story

柞原八幡宮(ゆすはらはちまんぐう)は歴史が古く、参道の石段を上ると左側に国の天然記念物の大クスノキ、神殿(しんでん)の後にはこんもりと茂(しげ)った森があります。この森はイチイガシ・コジイ・イスノキ・ヤブツバキなど、暖(あたた)かい気候に適した常緑広葉樹(じょうりょくよくこうようじゅ)が生(お)い茂って、今も原生林の姿(すがた)を保っています。煎(い)ると香ばしいイチイガシやコジイのドングリは、石器時代の人びとの大切な食糧(しょくりょう)でした。

東の参道を通って、森の中を観察してみましょう。いろいろな種類の樹木(じゅもく)が空間をうまく利用して枝を広げ、光を取り入れています。うす暗い林の中と光がさしむ明るい場所では、植物がどのように違(ちが)うかくらべてみましょう。落ち葉の下は小動物やカビ・細菌(さいきん)の仲間がたくさんすんでおり、落ち葉を分解して土をつくっています。森林の土はふわふわしたパンのようにすき間が多く、雨水をよく吸収(きゅうしゅう)して大量の水を貯(たくわ)えることができるのです。「緑のダム」といわれています。

靈山寺(りょうぜんじ)駐車場からぐるりと一周巡回(じゅんかい)できる徒歩コースがあります。歩いておよそ30分。ゆっくり観察しながら、1時間以上は使いたいコースです。

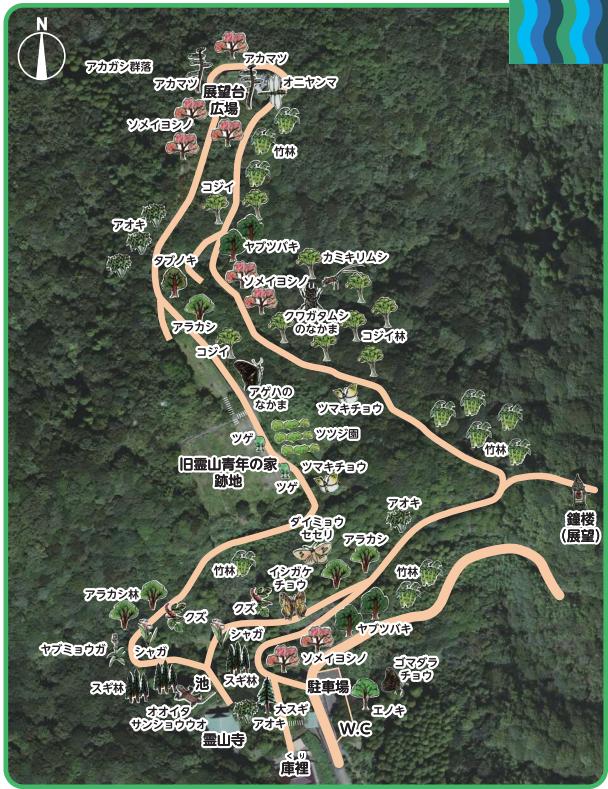
駐車場のそばに大きなエノキがあります。このエノキをえさにするのはゴマダラチョウやテングチョウ、ヤマトタマムシなどです。寺のすぐ上には、杉林(すぎばやし)に囲まれた池があり、この付近はオオイタサンショウウオの生息地です。

坂を一気に上ると旧青年の家跡地(あとち)が見えてきます。青年の家跡地から大分市街地が一望できます。また、斜面(しゃめん)のツツジの花には、ミヤマカラスアゲハほ

か多くのチョウ類が集まります。正面の外灯には、夜になると、各種の昆虫が集まり、珍(めずらしい種類も発見されています。

ここをさらに進むと、春にはツマキチョウやミヤマセセリ、夏は道沿(ぞい)にハンミョウなども飛んできます。周囲の森はコジイやアラカシ、タブノキなどの常緑樹(じょうりょくじゆ)にエノキやコナラなど落葉樹(らくようじゆ)が混じっています。また、山頂へ向かう登山道を歩くとウラジロガシやアカガシなどの自然林が見られます。

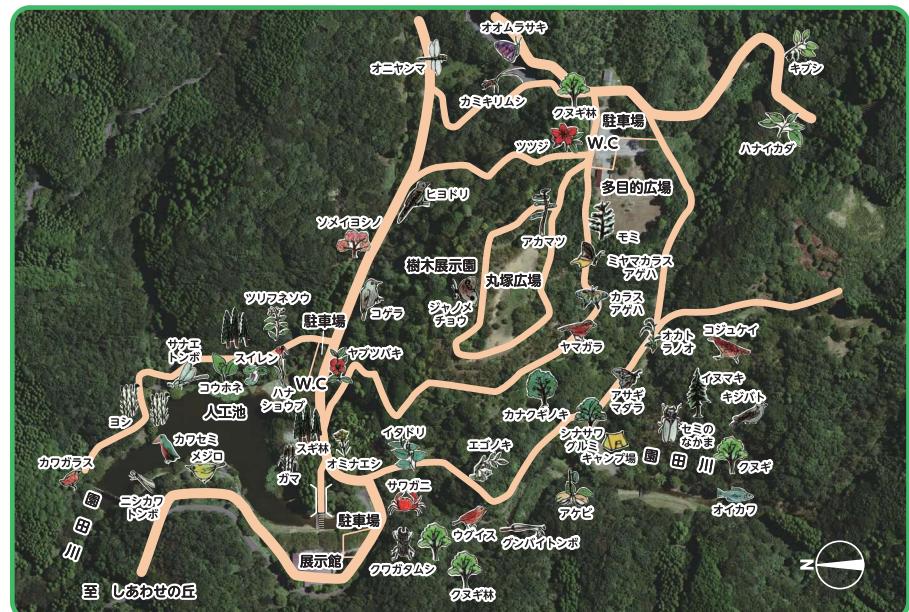
夏のころには、カッコウやホトトギスの声も聞けます。



②キャンプ場周辺は、初夏のころ、エゴノキの白い花、葉の上に花をつけるハナイカダ、夏から秋にかけてピンクの花をつけるカワラナデシコや黄色いオミナエシなど可愛い(かわいい)らしい花をつける植物が観察できます。谷川ではサワガニ・トンボのヤゴ・カワニナなどの水生動物などもみられます。

①人工池周辺では、コウホネやスイレンなどの水生植物や初夏から真夏にかけて道端(みちばた)にはホタルブクロやツリフネソウなどのきれいな花がたのしめます。また、カイツブリやカワセミなどの水鳥やドンコなど魚の行動が観察できます。さらにウグイスやホオジロなどの野鳥の声も聞かれます。

③丸塚広場周辺では、初夏の日当たりのよい道端に白い花をつけたオカトラノオの花が咲(さ)き、チョウの仲間が集まります。また、樹木(じゆもく)展示園付近は春にコブシの花やサクラの花、初夏にヤマツツジの花がみごとです。



高瀬(たかせ)石仏前付近の七瀬川(ななせがわ)は、くねくねとS字型に曲がって流れています。川の水は、曲がった外側の部分をけずり、泥(どろ)・砂(すな)・小石などを内側につみかさねて、川原(かわら)を作ります。その川原は、毎年何回かの大水で変化することがありますので、そこにすんでいる動物や生えている植物にも変化が見られます。

Field Story

また、七瀬川自然公園には、竹林やアラカシなどが残っていて、昆虫類の観察にはよい場所です。さらに、水辺にはツルヨシやミゾソバなどが生えています。きれいなせせらぎでは、カジカガエル・カマツカ・ゲンジボタル・カゲロウ類・トビケラ類などの水生動物も見られ、観察するには大良い水域(すいいき)です。



Field Story

ガコガネグモなどのクモ類が巣を作っています。

きれいな流れの中にはオイカワ・ドンコなどの魚が泳ぎ、きれいな声で鳴くカジカガエルもいます。また、カゲロウ類・トンボ類・トビケラ類などの幼虫(ようちゅう)がすんでいます。さらにゲンジボタルもいます。

川原の石はれき岩と砂岩(さがん)という石で、今からおよそ1億年前という、とても古い時代にできたといわれています。

河原内川(かわらうちがわ)河川(かせん)プール付近の川原(かわら)には一面にツルヨシの群落(ぐんらく)があります。ツルヨシは最初横の茎(くき)をのばし、次にその節から根と上に伸(の)びる茎を出して、どんどん増えていくことができます。そのため大水にあっても、ツルヨシの群落はすぐ回復することができます。そのほかオイヌタデ・ジュズダマ・ミゾソバなどの水辺の植物がはえています。

川原にはハグロトンボやハンミョウなどの昆虫類が飛びまわっていますし、ナ





コースの詳細は「OITA自然観察ガイド」としてまとめています。
ぜひ、ご覧ください。

Field Story

佐賀関(さがのせき)半島は、樅木(もみのき)山[484m]を頂点(ちょうてん)とする樅木山系(さんけい)が東へ延(の)びて突(つき)出しているため、黒潮(くろしお)が洗う臼杵湾(うすきわん)側と冬季北西季節風が吹(ふ)き付ける別府湾(べっぷわん)側で環境が大きく変わります。臼杵湾に面した南岸はハマオモト、アコウが生育し、岩場にはウバメガシ群落が見られます。これと対称的(たいしょうてき)に北岸では、ハマ

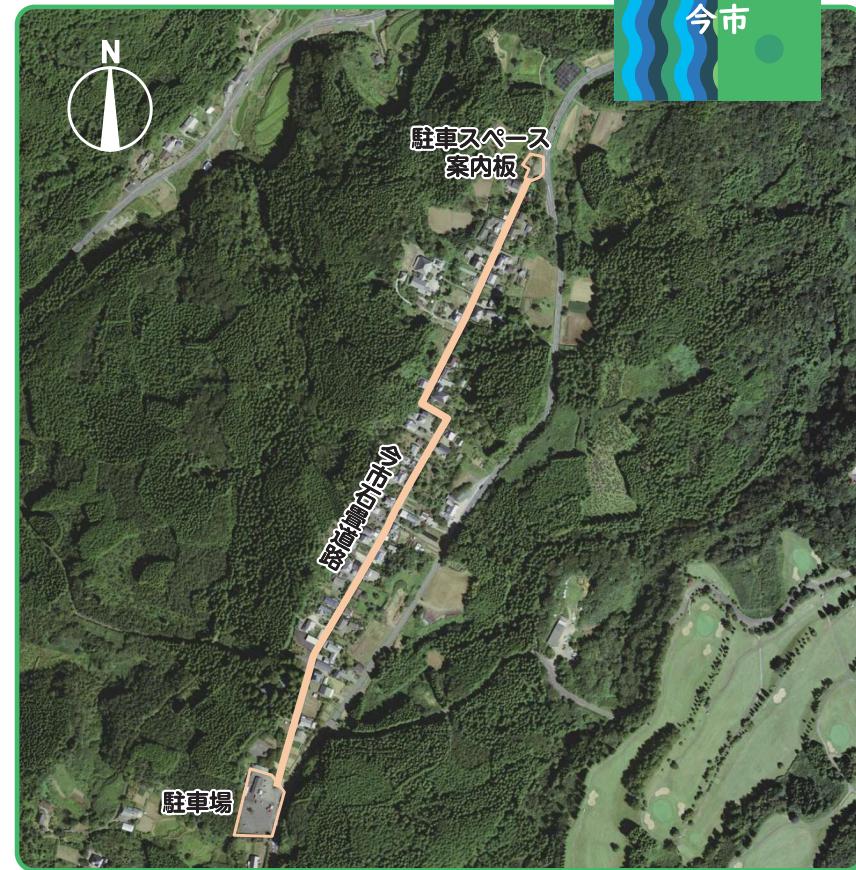
ビワ群落が海食崖(かいしょくがい)を覆(おお)うように帶状に分布しています。神崎(こうざき)海水浴場には、砂浜(すなはま)の水際(みずぎわ)近くにコウボウシバやコウボウムギが、その後方にはハマヒルガオ・ハマゴウ・ハマエンドウなどの海浜(かいひん)植物が群落を作っています。また、海食崖はハマビワ群落に覆われており、タブノキ・クロガネモチ・トベラ・ハマヒサカキなどの樹木(じゅもく)が生育しています。



Field Story

今市(いまいち)の石畳(いしだたみ)道路は、江戸時代の参勤交代(さんきんこうたい)道路の宿場町として栄え、本陣(ほんじん)、脇本陣(わきほんじん)をはじめ、茶屋、代官所造酒屋など、軒(のき)を並(なら)べてにぎわっていました。道幅(みちはば)8.5mの中央に幅2.1m、長さ660mにわたり、全面平石が敷(し)き詰(つ)められており、全国的にもこれだけの長さの石畳が残っているのは稀(まれ)で、県文化財史跡(しけい)に指定されています。

高岩(たかいわ)神社は、天安2年に紀州熊野本宮(きしゅうくまのほんぐう)の神主(かんぬし)が建立(こんりゅう)したとされています。御神木(ごしんぼく)のトチノキは、推定樹齢(すいていじゅれい)1150年、幹回(みきまわ)り7m、樹高(じゅこう)35m、枝葉は30m程(ほど)に広がっています。ほかに2本のトチノキ・ナギ・イヌノキなどの古木も生育しています。



植物【春】

絶滅危惧I
EX
EW
CR

絶滅危惧II
EN
VU

絶滅危惧III
NT

準絶滅危惧
DD

絶滅のおそれのある地域個体群
LP



1 サイハイラン
開花時期: 5月～6月ごろ
草丈: 30～50cm程度
【生息場所】山
林・草原



2 シュンラン
開花時期: 3月～4月ごろ
草丈: 10～30cm程度
【生息場所】山
林・草原



3 ムラサキケマン
開花時期: 4月～6月ごろ
草丈: 30～50cm程度
【生息場所】林・草原
里

早春の雑木林などに生育するラン科の多年草。培養(ばいよう)がむずかしいため、園芸用流通品の多くは野生採取株を増やした株です。



4 アケビ
開花時期: 4月～5月ごろ
つる性低～高木
【生息場所】山
林・草原



5 ヤマフジ
開花時期: 4月下旬～5月ごろ
落葉つる性低～高木
【生息場所】山
林・草原



6 ヤマザクラ
開花時期: 3月下旬ごろ
【生息場所】山
高木

マメ科のつる性落葉木本。ほかの樹木などにまきついで、古くなると木質化します。藤棚(ふじだな)などのフジとはちがう日本固有の野生種。



7 マルバウツギ
開花時期: 5月～6月ごろ
低木
【生息場所】山
林・草原



8 ハマボッス
開花時期: 5月～6月ごろ
草丈: 10～40cm程度
【生息場所】磯
砂浜



9 アラゲコバノミツツヅキ
開花時期: 3月～4月ごろ
低木
【生息場所】山

岩場や海岸林などある海辺の砂浜に生育するサクランソウ科の越年(えつねん)草。葉は潮風(しおかぜ)や乾燥(かんそう)にたえるため、多肉質で光沢があります。



10 ケティカカズラ
開花時期: 5月～6月ごろ
つる性低～高木
【生息場所】山
林・草原



11 ソクシタツナミソウ
開花時期: 5月～6月ごろ
草丈: 10～30cm程度
【生息場所】林
草原



12 オヤブジラミ
開花時期: 4月～5月ごろ
草丈: 30～70cm程度
【生息場所】林・草原
里

山地の草原や林縁などに生えるシソ科の多年草。シソバツナミソウの変種でしたが、葉の長さや色などから別種扱いとなっています。

大分市の森や野原や水辺には様々な植物が見られます。その植物たちまたエサとなって動物の命をつなぎ、菌類に分解されて次の世代のは様々な動物や菌類(きんるい)と色々なかかわり方をして命をつなぎ、植物の栄養となって、未来の生物たちの命を支えていきます。



13 コクリン
開花時期: 6月～7月ごろ
草丈: 15～30cm程度
【生息場所】山



14 ネジバナ
開花時期: 4月～9月ごろ
草丈: 10～40cm程度
【生息場所】里

里山の林縁(りんえん)などに生えるラン科の多年草。花は地味で小さく、園芸的価値はありませんが、野生ランとしてネット販売されています。



16 キツネノカミソリ
開花時期: 8月～9月ごろ
草丈: 30～40cm程度
【生息場所】林・草原
里



17 ヒンジガヤツリ
開花時期: 8月～10月ごろ
草丈: 5～30cm程度
【生息場所】田んぼ
里

明るい林床や林縁などに自生するヒガンバナ科の多年生草本。有毒植物。葉の形をキツネが使うカミソリに見立てて名付けられました。



19 マルバコウツギ
開花時期: 6月中旬～7月上旬ごろ
低木
【生息場所】林・草原



20 ヘクソカズラ
開花時期: 7月～9月ごろ
高さや長さは様々
【生息場所】林・草原
里

山野に生えるユキノシタ科の落葉低木。大分・熊本・宮崎各県の阿蘇火碎流(あそさいりゆう)分布域と、岡山県の一部のみに分布する日本固有の種です。



22 クサギ
開花時期: 7月～9月ごろ
低木
【生息場所】山
林・草原



23 ツボグサ
開花時期: 6月～8月ごろ
草丈: 10～30cm程度
【生息場所】林・草原
里

林縁や原野に生えるシソ科クサギ属の陽樹(ようじゅ)。和名はくさいことにちなんますが、若芽(わかめ)は食用に、天日乾燥して生薬(しょうやく)としても利用されます。

植物【夏】

植物



15 ヒオウギ
開花時期: 7月～8月ごろ
草丈: 60～120cm程度
【生息場所】林・草原
山

山野や海岸に自生するアヤメ科の多年草。まっ黒い種子は、射干玉(ぬばたま)とよばれ、「黒」や「夜」にかかる枕詞(まくらことば)になっています。



18 コガンピ
開花時期: 7月～9月ごろ
小低木
【生息場所】林
草原

日当たりの良い開けた草地などに生育するジンチョウゲ科ガンピ属の落葉小低木。草地の減少(げんしょう)にもなって絶滅(げきせん)しています。



21 ソナレムグラ
開花時期: 8月～9月ごろ
草丈: 5～20cm程度
【生息場所】磯

海岸の岩場に生育するアカネ科シマザクラ属の多年草。葉は肉厚で光沢があります。磯(いそ)に生えるムグラ(草むら)と言う意味です。



24 ハンカイソウ
開花時期: 6月～8月ごろ
草丈: 50～150cm程度
【生息場所】山
林・草原

山地の林下やしめた草原に生育するキク科メタカラコウ属の大型の多年草。勇壮(ゆうぞう)な姿を中国の武将(ぶじょう)に見立てて名付けられています。

植物【秋】

絶滅危惧 I A類

絶滅危惧 I B類

絶滅危惧 II 類

準絶滅危惧

情報不足

絶滅のおそれのある地域個体群



25イチョウの黄葉
黄葉時期:11月~12月上旬ごろ
高木



26ヤマコウバシの実
結実期:10月~11月ごろ
低木



27ツルボ
開花時期:8月下旬~9月ごろ
草丈:20~40cm程度

日当たりの良い土手などの草地に生育するキジカクシ科の多年草。秋の初めに、地下に球根からピンク色の花穂(かすい)を出します。



28エビヅル
結実期:8月~10月ごろ
落葉つる性低~高木



29アカシデの紅葉
紅葉時期:10月下旬~12月ごろ
高木



30マサキの実
結実期:11月~1月ごろ
低木

海岸近くの林に多く生えるニシキギ科の常緑低木。初夏に白い花が咲(さ)き、秋に柄(え)のある球形をした果実が実ります。



31イロハモミジの紅葉
紅葉時期:11月中旬~12月上旬ごろ
高木



32ミゾソバ
開花時期:7月~10月ごろ
草丈:30~80cm程度



33ヒメジソ
開花時期:9月~10月ごろ
草丈:20~60cm程度

池畔(ちはん)、川ぞいなどに自生するタデ科の一年草。別名は花の姿からコンペイトウグサ、葉の形からウシノヒタイとも呼ばれ、蜜源(みつげん)として重要です。



34ヤクシソウ
開花時期:8月~11月ごろ
草丈:30~120cm程度



35アキノノゲシ
開花時期:8月~12月ごろ
草丈:50~200cm程度



36ガマズミの実
結実期:8月~10月ごろ
低木

明るい林に生えるガマズミ科の落葉低木。果実は生食のほか、果実酒や大根の赤漬(づけ)などに利用されます。鳥やサルも好んでいます。

草、1回だけ冬を越す越年草(えつねんそう)または二年草、冬を越えられない一年草があります。



37サネカズラの実
結実期:10月~12月ごろ
つる性低~高木

マツブサ科のつる性常緑木。茎(くき)などから得られる粘液(ねんえき)は昔は整髪料(せいろはつりよう)などに用いられ、果実は生薬(じょうやく)とされていました。別名ビナンガズラ。



38シロダモの実
結実期:10月~11月ごろ
高木

山地や低地の森林内に生えるクスノキ科シロダモ属の常緑高木。精油による芳香があります。種子から採油し、ろうそくの材料となります。



39ナンテンの実
結実期:10月~11月ごろ
低木

暖地(だんち)の渓流ぞいなどに生育するメギ科の常緑低木。「難(なん)を転ずる」として縁起(えんぎ)の良い木とされています。どのめの原料にも使われています。



40ネムノキの冬芽と葉痕
冬芽観察時期:12月~4月ごろ
高木

各地の山野、河岸(かし)に自生するマメ科の落葉高木。夜になると小葉がじて垂れ下がる就眠(しゅうみん)運動を行っています。葉痕(ようこん)はフクロウの顔。



41ムクノキの実
結実期:10月~12月ごろ
高木

アサ科ムクノキ属の落葉高木。果実は甘く、ムクドリをはじめ様々な鳥が集まります。ざらついた葉は、漆器(しっき)などのけんま器(ざい)に利用されます。



42オニグルミの冬芽と葉痕
冬芽観察時期:12月~4月ごろ
高木

河畔(かはん)などに生育するクルミ科の落葉性高木。日本産で唯一(ゆいいつ)の食用くるみ。葉痕(ようこん)は羊の顔。※くるみアレルギーの人は注意が必要です。



43ハゼノキの紅葉と実
結実期:10月~11月ごろ
高木

日当たりの良い山野に生えるウルシ科の落葉小高木。秋に美しく紅葉します。果実から採取した木蝋(もくろう)などをいち早く葉を広げる先駆性(せんくせい)植物の一種。葉痕(ようこん)はサルの顔。



44カラスザンショウの葉痕
冬芽観察時期:12月~4月ごろ
高木

沿岸(えんがん)地や山野などに生えるミカン科の落葉高木。伐採跡(ばさいあと)などでいち早く葉を広げる先駆性(せんくせい)植物の一種。葉痕(ようこん)はサルの顔。



45センダンの実
結実期:10月~12月ごろ
高木

海岸近くや森林辺縁(へんえん)に多く生えるセンダン科の落葉高木。果実はしもやけ、樹皮(じゅひ)は虫下しなど、薬用として重宝(ちゅうほう)されていました。



46ヤドリギの実
結実期:11月~12月ごろ
高木に寄生、30cm程度

ビャクダン科の寄生植物で、他の樹木の枝の上に生育する常緑の多年生植物。果実は主に冬鳥たちに食べられ、遠くへ運ばれます。



47ヤブツバキ
開花時期:12月~3月ごろ
低木~亜高木

山地に生える常緑の日本固有樹種。観賞(かんしょう)目的で庭木にしたり、種子から油を探ったり、かたく総密(ちみつ)な材は器具等に利用されます。



48シマカンギク
開花時期:10月~1月ごろ
草丈:30~80cm程度

日当たりの良い山麓(さんろく)に生えるキク科の多年草。キクの原種の一つ。花を油(つ)けてきて葉にしたため油菊(あぶらざく)とも呼ばれます。別名ハマカンギク。

植物【冬】

昆虫

レッドデータブック大分2022に選定されている238種のうち、98種もの池、海岸の一部には開発や汚染(おせん)を免(まぬが)れた優れた自然

絶滅
EX

野生絶滅
EW

絶滅危惧
CR

絶滅危惧
EN

絶滅危惧
VU

準絶滅危惧
NT

情報不足
DD

絶滅のおそれのある地域個体群
LP

昆虫が大分市で確認されています。高い山はありませんが、今なお残る里山の田園景観、川や
があり、多様性豊かな昆虫相を示しています。ここでは身边に観察できる昆虫たちを紹介します。

昆虫



水生植物が豊富な池で見られます。オスは鮮(あざ)やかな赤い色が目立ちますが、メスは薄紅(うすべに)色。池のまわりをゆっくりと飛びます。



平地から山ぞいの、流れのゆるやかな里山の川で見られます。オスはハグロトンボによく似ていますが、発生時期が早く、真夏にはすがたを消します。



平地から丘の、広い池などで見られ、池のまわりを飛びまわります。小さな池で春先から見られるのはクロスジギヤンマで、よく似ています。



里山の田んぼで明るい池や湿地(しつち)などで発生します。よく似たフタスジサンナエとともに春先から見られ、飛んではすぐに止まります。



平地～山地のヨシやガマなどの植物がしげる深さのある池で見られ、平地のベッコウトンボがいる池では見まちがえることがあります。



平地の植物が多い池や湿地で、早春から夏までよく見られます。写真はメスで、オスは黒っぽい色をしていて別の種のように見えます。



ハネが短い茶色の小さなカマキリ。低山地の林で、落ち葉や枯れ木の上を歩き、近づくと飛びはねるがたがわいいです。



里山や平地の公園や明るい林で見つかります。木の枝に止まっていることが多いです。ごく最近、よく似た大型の外来種、ムネアカハラビロカマキリが市内に侵入(しんにゅう)しました。



顔の先がとがったキリギリスの仲間。水田の土手や草むらで、春一番の風が吹(ふ)くころに冬眠(とうみん)から覚めて、ジーンと鳴き始めます。



平地～山地の林で枝先などに止まっていて、よく気をつけないと見つかりません。動きはのろいが飛ぶことができます。



マツ林にしかいないセミ。春のひざしを浴びて、いっせいに鳴き始めます。最近はマツ林が少なくなり、鳴き声を聞くことも少なくなりました。



低山地～山地の森でミズキなどの木の枝先に止まり、せなかのハートもようがよく目立ちます。むねの両端(りょうたん)がとがっているのはツノカヘンムシ科の特徴です。



広い池や川の岸辺で水面を泳ぐ日本最大のアメンボ。水面に落ちた小さな虫などを食べます。飛ぶ力が強く、川から池へと移動できます。



里山の田んぼや池によく見られる種でしたが、最近は少くなりました。オスのせなかにうみ付けられた卵(たまご)を春先から見かけます。



林の明るい小道や河原の砂地(すなじ)などを活発に歩き、よく飛び、美しいもようが目立ちます。小さな昆虫などをおそろい食肉昆虫です。石の下などで成虫は冬を過ごします。



河川の水ざわや里山の池などの湿地にみられ、一年中活動している大型のゲンゴロウです。最近、個体数が増えているといわれます。



平地～山地の広葉樹(こうようじゅ)の森にみ、たおれた朽(く)ち木で幼虫が育ちます。同じような場所にいるコクワガタに似ていますが、個体数は少ないです。



夏、森の中や公園の林を歩くと、甘いおりがします。近づくと、木のみきから樹液(じゆえき)がにじみ、銅色に輝(かがや)くカナブンが集まっています。オアカナブンのような緑色の個体も見つかります。



里山や平地の水生植物の多い池や水路で見つかります。一生を水中で過ごします。ミズカマキリより個体数は少なく、分布も限られます。



森の昆虫で、動物の糞(ふん)やくさった植物に集まります。森の中を低くぬうように飛び、せなかはよく輝(かがや)きます。その色は所によって赤や青色に変化することがあります。



カミキリムシに似た形のジョウカイボンのなかでは最大級の美しい種。山にクリの花が咲(さ)き始めると集まつてきます。



平地～低山地の川ぞいで夜、光りながら飛ぶすがたは初夏の日本の風物詩(ふうぶつし)。田んぼのまわりを少しおそい時期に飛ぶハイケボタルはむねの黒いスジもようが太いです。



大型のテントウムシ。どこにでもいる虫ではありませんが、河原や山ぞいの道を歩いてクワの木を見つけたら、葉に止まっています。クワキジラミという小さな昆虫を食べます。



川や草原、山の明るい自然では、どこでも見つかりますが、いろんなもようがあるので別の種かと思ってしまいます。写真のように、冬はほかの昆虫といっしょに集団で冬ごしします。

昆虫

レッドデータブック大分2022に選定されている238種のうち、98種もの池、海岸の一部には開発や汚染(おせん)を免(まぬが)れた優れた自然

絶滅
EX

野生絶滅
EW

絶滅危惧
CR

絶滅危惧
EN

絶滅危惧
VU

準絶滅危惧
NT

情報不足
DD

絶滅のおそれのある地域個体群
LP

25ニホンキマワリ
よくみられる時期:春~秋
体長:22mm

[生息場所]
公園
山



森の中で木のみきや枝の上をはいまわる黒いつやのある甲虫(こうちゅう)。コケや朽(く)ち木を食べています。

26シラケトラカミキリ
よくみられる時期:春~夏
体長:10mm

[生息場所]
林・草原
里



春先からあらわれ、いろんな花やたおれた木のえだ先をせわしく歩きまわります。近づくと飛んでにげますが、すぐにまた集まります。

27ルリボシカミキリ
よくみられる時期:夏~秋
体長:25mm

[生息場所]
山・里



ルリ色に黒いもようがあり、見つけるとハッとする美しいカミキリムシ。森のはずれに切りたおされた木があれば、見つかるかもしれません。

昆虫が大分市で確認されています。高い山はありませんが、今なお残る里山の田園景観、川や
があり、多様性豊かな昆虫相を示しています。ここでは身边に観察できる昆虫たちを紹介します。

37ムラサキツバメ
よくみられる時期:早春~晚秋
体長:開帳24mm

[生息場所]
山
公園



シリブカガシのある山にすみ、公園のマテバンイでも育ちます。成虫で冬ごしするため、ときどき家の庭の木のうらで集まって見つかることもあります。ムラサキシジミに似ています。

38ツバメシジミ
よくみられる時期:春~秋
体長:開帳13mm

[生息場所]
川
公園



平地~山地の道ぞいの草むらで、マメ科植物を食べて成虫になります。明るい草地があれば町の中でも見られます。オレンジの紋(もん)でヤマトシジミと区別できます。

39ミドリヒョウモン
よくみられる時期:夏~秋
体長:開帳40mm

[生息場所]
山・里



森にすむヒョウモンチョウ。幼虫のエサはスミレ類。森の中の明るい道ぞいや草地の花に集まりますが、飛び方はすばやいです。オスもメスもハネのうらが緑色をしています。

40ウラギンヒョウモン
よくみられる時期:夏~秋
体長:開帳36mm

[生息場所]
林・草原
里



山のすそ野の明るい草原を飛びまわり、いろいろな花に集まりますが、最近は少なくなりました。明るい場所のスミレ類が幼虫のエサ。ハネのうらの銀色紋が美しいです。

41ヒカゲチョウ
よくみられる時期:夏~秋
体長:開帳34mm

[生息場所]
山



山地のササやタケが多いところで発生しますが、分布はとても限られ、少ないです。同じようなところにいる、よく似たクロヒカゲはとても多いですが、そのわけは分かりていません。

42コジャノメ
よくみられる時期:春~秋
体長:28mm

[生息場所]
里・山



林の道ぞいを低く飛びますが、ヒメジャノメよりも少なく、見つかるところも少ないです。うす暗いところで、よう虫はイネ科植物を食べて成虫になります。

43サトキマダラヒカゲ
よくみられる時期:初夏~夏~秋
体長:34mm

[生息場所]
林・草原
里



平地~山地のササやタケ類があるところは多いです。木かけに止まっていて、人が歩くとすばやく飛んで、すぐとまります。よく似たヤマキマダラヒカゲとは区別がむずかしいです。

44アサギマダラ
よくみられる時期:初夏~秋
体長:開帳60mm

[生息場所]
山・沢



春と秋に旅をする美しいチョウとして有名です。春は佐賀関(さがのせき)半島でも南からわたってきたすがたが見られます。夏は山の谷すじの白い花にふわふわと飛んでいます。

45ミカラドアゲハ
よくみられる時期:初夏~秋
体長:開帳45mm

[生息場所]
山
公園



南方系の種で、佐賀関半島から南の海岸の自然林では、オガタマノキを食草として発生します。5月には林縁(りんえん)の白い花を次々に飛び交います。

46ミヤマカラスアゲハ
よくみられる時期:春~夏
体長:開帳70mm

[生息場所]
山・沢



山の荒地や道沿いのカラスザンショウなどで成虫が育ちます。春にあらわれる個体はこがね色のオビもようがとくに美しいです。オスはしめったところによく集まります。

47ツマグロキチョウ
よくみられる時期:春~秋
体長:開帳20mm

[生息場所]
里
林・草原



河川敷(じき)や里山の荒地(あれち)のカラスケツメイというマメ科植物を食草とします。手入れが行き届く場所にはいません。全国で個体数が減少しています。

48セスジズズメ
よくみられる時期:初夏~秋
体長:開帳30mm

[生息場所]
里
田んぼ



成虫はジェット機のようなすがたのスズメガの仲間。目玉もようが目立つ幼虫は、ヤフカラシなどの雑草やサトイモの害虫でもあります。人里によくあらわれます。

哺乳類

大分市には標高の高い山がないため、モモンガやヤマネ、カモシカなど高山的多くの種が生息しており、外来種を含めると39種の哺乳類が確認(かく)

絶滅 EX
野生絶滅 EW
絶滅危惧 I A CR
絶滅危惧 I B EN
絶滅危惧 II VU
準絶滅危惧 NT
情報不足 DD
絶滅のおそれのある地域個体群 LP



雌雄(しゆう)のつがいで行動します。全身の毛がぬけ落ちてしまうカイセン症(じょう)を発症します。空き家や寺社ののき下などをすみかとし、雑食性で、は虫・両生類や昆蟲、鳥類、果実や種子などを食べます。日本にのみ生息する固有種で、おどろくと死んだりふります。

単独行動で広いなわばりの中をパトロールします。肉食よりの雑食性で、ネズミやウサギ、鳥類を食べます。大分市においてはタヌキよりも個体数は少なく、大野川周辺の田畠でしばしば目撃されます。

冬の毛がわりで、胴(どう)部の毛の色はかつ色から黄色に、顔中心部は黒色から白色になります。雑食性で、小型哺乳類・は虫類・昆虫・植物・果実までは広く食べます。樹上(じゅじょう)生活得意としており、なわばりを持ちます。



オスがメスよりも約3倍大きいという性的な二型をしめします。ネズミを多く食べるため、イタチが減るとネズミが増えます。肛門(こうもん)の左右に鼻臍(しゆうせん)を持ち、きげんを感じると独特のにおいがする液体を霧吹(きりふき)状に噴射(ふんしゃ)します。

するどく太いツメで穴をほって巣を作ります。イタチの仲間で雑食性。目は悪いですがすぐれた嗅覚(きゅうかく)を持ち、すりばち状の穴をほってミミズをピンポイントで取り当て食べます。慣用句「同じ穴の貉(むじなし)」の貉はタヌキとアナグマのことで、両種が同じ穴を共有してすみかとすることが由来です。

休耕田や林内のヌタ場で転がって体表に泥(どろ)をぬり、ダニなどの寄生虫を落とします。雑食性ですが、主に地中にある植物の根や、タケノコ、ヤマイモなどを鼻先でほって食べます。スキやカヤ、クズなどを利用してドーム状の巣を作ります。



オスの角は毎年3月に自然に落ち、4月ごろから袋角(ふくろづの)とよばれるビロー状の皮ふがついた状態で新しく生えています。3歳(さい)までは角の枝分かれの数で年齢が分かります。草食性でイネ科の草本やササ、堅果(けんかく)を食べ、150cmをこえる跳躍(ちょうやく)力を持っています。

雪がつまる地域では冬に体毛の色が白色となります。キュウシュウノウサギは、一年中かっこです。完全草食性で草から木まで多様な植物を食べます。野生下での寿命は約20年で、群れの中にさしこい順位(じゅんい)関係があります。「高崎山のサル生息地」は国の天然記念物に指定されています。

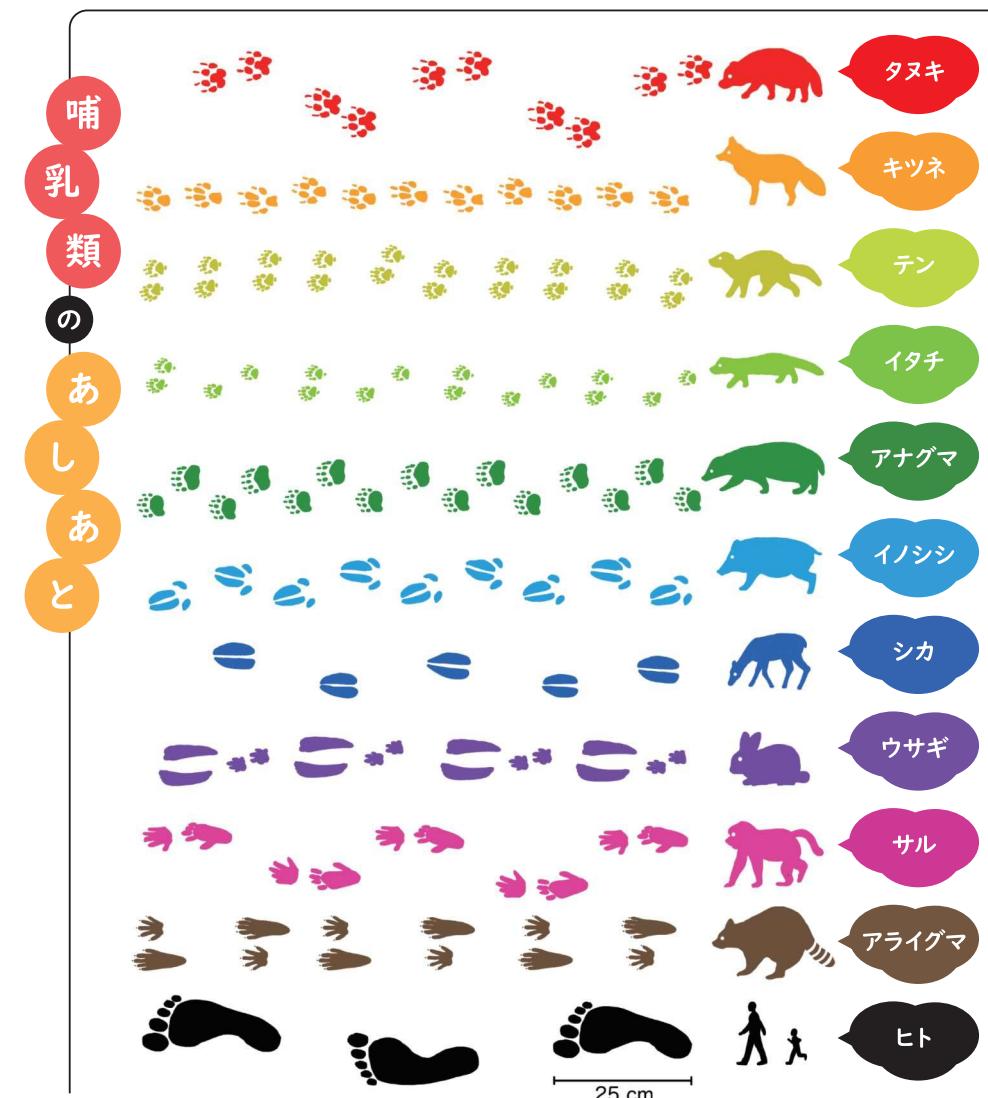
写真提供:①~⑨森田祐介

COLUMN

野生動物と農業被害(ひがい)

近年、大分市において森林や野山は、住宅や工場を建設するために開発が進み、野生動物が生活を保つための食料や寝床(ねどこ)を確保するためには、絶対的に広さが足りていません。タヌキやキツネのように古来より人間の生活圏(けん)の中で生きてきた種もありますが、イノシシやシカ、アナグマのように、数十年前には山奥でしか見られなかったものが、人間の家のすぐ近くで見られることが多くなり、経済(けいざい)的な損失も増えています。とくに農業被害では、家庭菜園など農業を小規模(きぼく)に行う人ほど被害感情が大きくなります。ここで考えたいのが、農作物を食害する動物は本当に悪いのかということです。生息できる山林はせまくなり、食料の確保がむずかしくなっていますが、何の防御策(ぼうぎょさく)もしていない人間が耕す

性の哺乳(ほにゅう)類は生息していませんが、田畠やため池などがある里山環境においては比較(ひかくにん)されています。その中でも実際に目撃(もくげき)することが多い9種を掲載(けいさい)します。



畠では、山では得られるはずもない高栄養価、高糖度(こうとうど)の作物がかんたんに手に入ります。農作物を食害するはある意味、野生動物にとっては自然な行動とも言えます。農作物を食害した野生動物は、有害鳥獣(ちようじゆう)と名を変え、駆除(くじゆ)されるべき対象に変わってしまいます。人間も生活していく上で増えすぎた野生動物を駆除することは仕方ないことではありますが、適切な防護策(鉄柵(てきさく)、電気柵(でんきさく))をしていれば、食害を受けず野生動物は野生動物のまま生を全(まつと)うできるのではないかでしょうか。食害をふせぐことは、野生動物が自然の姿で生きいくことを助けることでもあり、人間と野生動物が適切なきよりで共存することにもつながります。今一度、野生動物と人間の関係を考えてみましょう。

鳥類

大分県下では375種、その内大分市では313種の鳥が記録されています。
佐賀関(さがのせき)半島では春と秋にはタカの渡(わた)りなどにも見る

絶滅
EX
野生絶滅
EW
絶滅危惧
CR
I A類

絶滅危惧
I B類
EN

絶滅危惧
II類
VU

準絶滅危惧
NT

情報不足
DD

絶滅のおそれのある地域個体群
LP



冬鳥として渡来(とらい)します。オスは頭から頸にかけて光沢のある緑色で白い首輪があります。くちばしは黄色です。メスは全体が黒い斑点(はんてん)のかっこでくちばしはオレンジ色です。



冬鳥として渡来します。カモ類の中で一番小さいです。オスの頭部は濃い茶色で目の周りから後部にかけて濃い緑色、お尻は黄色。メスは全身黒っぽい茶かっこです。



雌雄同色。以前は冬鳥として渡来していましたが、現在は生息地を拡大して、多数見られるようになりました。全身が黒く、くちばし・額が白いです。潜水(せんすい)してエサを食べます。



雌雄ほぼ同色。腹や頭の白が目立ちます。水面でホバリングし、水に飛びこんで魚をとります。巣(えいそう)は海岸の岩礁(がんじょう)や内陸のかけ、大木で行います。

す。自然が豊かなので、川では水辺の鳥、木々の多いところでは山野の鳥に出会うことができます。ことができますが、海辺の干潟(ひがた)が減少しているので、シギ・チドリ類の数は少ないです。



雌雄同色。イヌワシに次ぐ大型のタカです。下面は細かい黄斑があり、つばさのはばが広いです。とまっているときにむねは白く見えます。上空をゆっくり飛びエサをさがします。



雌雄同色。夏鳥として渡来し、寺社林などの樹洞(じゅどう)で繁殖します。頭から背はこげ茶色で、胸には黄斑があります。夜は活発に飛び回り、甲虫類や蛾(が)をとなります。



頭から尾(お)まで上面は金属光沢のある青緑色で、背はコバルト色。オスはくちばしが黒く、メスはくちばしが赤いです。ホバリングしたり、枝などにとまり、水中の小魚をとります。



雌雄ほぼ同色。飛んでいるとき少しづらぐり見え、つばさの先がとがっています。顔には黒い頬(ほおひげ)があるように見えます。上面は灰色、下面は細く黒色黄斑があります。



夏鳥として渡来し、繁殖します。たて半分にしたトックリをはりつけたような巣が特徴です。雌雄同色で、頭から背は光沢のあるこん色で、腰(こし)の赤っぽい茶色が目立ちます。



夏鳥として渡来し、繁殖します。たて半分にしたトックリをはりつけたような巣が特徴です。雌雄同色で、頭から背は光沢のあるこん色で、腰(こし)の赤っぽい茶色が目立ちます。



雌雄ほぼ同色。ほぼ全身がいわゆる鶯(うぐいす)色。目のまわりにはその名の通り白いアイリングがあります。大分県の県鳥です。



雌雄ほぼ同色。頭から背は青灰色でつばさは黒く、白い眉斑(びはん)があります。腹(はら)は白っぽい黄色。河原の石で尾を上下に振るすがたで、「イシダタキ」とも呼ばれます。



オスは頭からむね、背にかけて明るい青色。腹は赤茶色で、雨覆(あまおおい)と風切りは黒いで。メスは地味なっか色で、むねから腹にかけてウロコもようがあります。内陸部でも見られます。



日本の三鳴鳥。夏鳥として渡来し、繁殖します。オスの上面は瑠璃(るり)色で頭頂(とうちゆう)は赤い氷水色で、額からノドが紅色です。メスは紅(べに)色がなくて茶色味があります。鳴き声が口笛に似ていて、桜のつぼみを食べます。



冬鳥として渡来します。オスは全身灰色。頭・つばさの先・尾が黒色、ほほからノドが紅色です。メスは紅(べに)色がなくて茶色味があります。鳴き声が口笛に似ていて、桜のつぼみを食べます。



雌雄同色。大きくて全体的に灰色に見えます。海岸や大きな河川に多いですが、水田などでも見られ、魚類やカエルなどを食べます。警戒(けいかい)心は強く、「ゴツッ」と鳴きます。

爬虫類

爬虫類の多くは虫やカエルなどを食べる捕食者(ほしょくしゃ)です。つまり、爬虫類がいる環境は多くの生物が暮らしている証(あかし)ともいえます。爬虫類の中にはかみつくもの、毒をもつものもありますが、どれもよく見てみるとかわいらしくもたくましい生き物たちです。

絶滅
EX

野生絶滅
EW

絶滅危惧
CR

絶滅危惧
EN

絶滅危惧
VU

準絶滅危惧
NT

情報不足
DD

絶滅のおそれのある地域個体群
LP

生息場所
川・池

最大甲長: $\varnothing 14\text{cm}$, $\varnothing 21\text{cm}$



[生息場所]

川・池

VU



[生息場所]

川・池

DD



[生息場所]

里

林・草原

DD

こうらの尻側の縁(ふち)がギザギザで、足のオレンジ色の線などが区別ポイント。外来生物の影響(えいきょう)などで数が減っています。



[生息場所]

里

林・草原



[生息場所]

里

・山



[生息場所]

里

・山

NT

ニホントカゲとまちがわれることが多いです。トカゲは体表がツヤツヤしていますが、こちらはガサガサしており、細身で尾が長いです。



[生息場所]

里

・山



[生息場所]

里

・山



[生息場所]

里

田んぼ

NT

地中でモグラやネズミなどを食べて生活しているため、めったに出会えません。写真は幼蛇(ようだ)で、大人は茶色く、背面(はいめん)の黒点もなくなります。



[生息場所]

里

田んぼ



[生息場所]

里

田んぼ



[生息場所]

里

田んぼ

水中ではオタマジャクシや小魚を、陸上ではカエルやミミズなどを食べる小型のヘビ。後頭部の白いもようが特徴です。

①②※特定動物(危険な動物)に指定されており、飼育禁止。

両生類

両生類は、一生しっぽをもつサンショウウオ科やオオサンショウウオ科などの有尾目(ゆうびもく)と、水中から陸に上がるときしっぽが消えるヒキガエル科やアマガエル科などの無尾目(むびもく)に分類(ぶんるい)されます。



[生息場所]

林・湿地

体長:150mm前後

VU



[生息場所]

池

田んぼ

DD

大分市内では山麓(さんろく)の水田や水たまりで12月~3月に産卵(さんらん)し、幼生(ようせい)まで成長します。成体は周辺の森の枯(か)れ木の下などで、昆虫やクモをエサとします。



[生息場所]

田んぼ

・山

NT



[生息場所]

田んぼ

・山

NT

平地や山間の水田・草地に生息する、黒かつ色から赤かつ色の中型のやや大きめのカエルです。眼(め)の側面から前足にかけ、黒い斑点(はんてん)が見られます。



[生息場所]

沢

・田んぼ

NT

山間の丘陵(きゅうりょう)地から山地の草むらに生息。日当たりの良い止水域(しずいき)に集まり、産卵します。黒かつ色から赤茶色の体色で、あごをのぞいて腹は白色で斑点があります。



[生息場所]

田んぼ

・山

NT

大型のカエルで、オスはせなかに黄緑色の線、メスは灰色の線があります。産卵後、水田や周囲の草地で過ごします。9月から翌(よく)年4月~5月まで、畑などで冬眠(とうみん)します。



[生息場所]

田んぼ

・山

NT

平地でも多く見られます。5月~7月、水の入った水田で産卵が行われ、「ゲコ・ゲコ」と大合唱が始まります。背中(せなか)は茶かつ色で、黒色の斑点があります。



[生息場所]

田んぼ

・山

NT

山間部の水田や草地で、3月から産卵が終ります。5月に、オスが「ケレ・ケレ・ケレ」と高音で鳴きます。せなか側は緑色・腹部は白色です。白い綿(わた)状の卵塊(らんかい)をうみます。



[生息場所]

川

・沢

NT

オスは灰かつ色の体色で不規則な模様、メスは茶かつ色で吸盤(きゅうばん)を持ちます。繁殖(はんしょく)期、オスは河原できれいな声を出します。メスはゆるやかな縦(れき)の間に産卵します。

魚類

約110種類の陸・淡水(たんすい)産魚類が大分県内で確認(かくにん)
大分市に生息する魚類の中でレッドデータブックおおいた2022の対象

絶滅
EX

野生絶滅
EW

絶滅危惧
CR

絶滅危惧
EN

絶滅危惧
VU

準絶滅危惧
NT

情報不足
DD

絶滅のおそれのある地域個体群
LP

されています。その中で42種類がレッドデータブックおおいた2022に選定されています。しかし種は14種類しかいません。わたしたちは今住んでいる魚も大切にしていかなければなりません。



タモロコに似ますが、モツゴには口ひげがなく、タモロコの方が寸胴(ぢんどう)体形をしています。泥底(どろどこ)のよどみに住んでいます。大分市ではクチボンと呼んでいます。

下を向いた口と1対の口ひげがあります。水生昆虫や有機物を底砂(そこすな)ごとすい込み、砂だけをエラあなから吐き出します。近くにエサを求めてシマドジョウがきます。

一度の産卵数は20万~60万個もあり、口ひげがあります。雑食性で、寿命(じゅみょう)は15~20年です。まれに70~80年も生きるものもあります。釣りの対象魚になっています。



7つのエラあなが目に見え、8つ目があるように見えます。幼生(ようせい)時は目が見えず有機物(ゆうきぶつなど)を食べ、成体は目が見て、口が吸盤(きゅうばん)になり内臓(ないぞう)はなくなります。

細長い体をかくすことができる砂(すな)の中や岩のわれ目などに住みます。昼間はそこにひそんで、夜行動します。水温が10°C以下になると、じっとしています。

石につけたコケを食べ、なわばりを持つものは、エラの後に黄色い線があります。大半が1さいしか生きず、独特のにおいがするので、年魚・香魚(あゆ)と呼ばれています。



サクラマス・ヤマメに似ていますが、赤い斑点(はんてん)があります。近くの林からの落ちてきた昆虫や流れてきた水生昆虫を食べています。

水が少しきれいな所で、流れがゆるい所を好みます。オイカワと住み分けをしています。大分の人はアカバエなどと呼んでいます。

繁殖(はんしょく)期のオスは顔が黒、体側が水色、腹(はら)が白く、尾(お)のビレをのぞかせ、前線(ぜんせん)が赤くなります。大人の人はシラハエと呼び、産卵(さんらん)期のオスをキンギョバエと呼んでいます。



川の上流から中流、山間の池にすみ、オスは口がへら状、体色は暗かつ色で、ウロコは小さく、体表はぬめりが強いです。大分の人はアブラメと呼んでいます。

口は丸く1対の口ひげがあります。水草に卵(たまご)をうみつけ、ふ化後は1年で5cmほどに成長します。大分市には昔(1950年ごろ)はいませんでした。

石の下や水草などに卵をうみ、他の魚にたんぱくもします。雑食で、口から尾ビレに1本の黒色の線が入ります。大分市には昔(1980年ごろ)はいませんでした。



タモロコに似ますが、モツゴには口ひげがなく、タモロコの方が寸胴(ぢんどう)体形をしていています。泥底(どろどこ)のよどみに住んでいます。大分市ではクチボンと呼んでいます。

一度の産卵数は20万~60万個もあり、口ひげがあります。雑食性で、寿命(じゅみょう)は15~20年です。まれに70~80年も生きるものもあります。釣りの対象魚になっています。

千潟(ちがた)の砂底(さなご)や砂泥底(さでいご)で見られ、スナモグリやアナジャコなどの巣あなを利用します。婚姻(こんいん)色はメスにあらわし、全体が黒くなり、腹部(ふくぶ)が黄色味をおびます。

大型水生甲殻類

絶滅

野生絶滅

絶滅危惧I類

絶滅危惧II類

絶滅危惧III類

準絶滅危惧

情報不足

絶滅のおそれのある地域個体群

1 サワガニ

【生息場所】
沢・川よくみられる時期:6月~9月
甲幅:25mm

日本にだけ生息し、一生を淡水域で過ごします。繁殖(はんしょく)期は夏で、メスはふ化した稚(ち)ガニを1ヶ月近く抱えています。

2 シオマネキ

【生息場所】
砂浜・磯よくみられる時期:6月~9月
甲幅:35mm

オスの片方のハサミが大きく潮(しお)をまねいてるようにそれをふるので(ウェーピングという)、シオマネキと名前がつきました。巣あなをほり、泥中(でいちゅう)の有機物(ゆうきぶつ)を食べます。

3 ハクセンシオマネキ

【生息場所】
磯・砂浜よくみられる時期:6月~9月
甲幅:16mm

河口付近の泥まじりの砂浜や転石海岸に住んでいます。オスのウェーピングが白い扇子(せんす)をふっておどるように見えます。水から少しぬなれたところに巣あなをつくります。

陸・淡水・汽水産貝類

大分県内で陸地や淡水・汽水にすむ貝は約300種近くあります。その中で大分省内にも約150種が生息しているといわれています。ごく一部ですが、下記にあげています。それぞれに似た貝がたくさんいますが、いずれも大切な生き物です。

1 ヒザラガイ

【生息場所】
磯繁殖期:7月~9月
殻高:50mm

潮間帯(ちょうかんたい)の岩の表面にあるくぼみや岩のすき間にひついて生活しています。だ円形で背面(はいめん)に8枚の殻(から)がありその殻(から)のまわりに丸く短い殻があります。長命な貝で20年くらい生きます。

2 マツバカイ

【生息場所】
磯繁殖期:5月~7月
殻高:50mm

放射(ほうしゃ)状にある赤かっ色の線がマツ葉(マツヒ)のようにみえます。天敵はイボニシなどの肉食性巻貝(まきがい)やヒラムシ類、ヒトデ類です。長命な貝で20年くらい生きます。

3 アマガイ

【生息場所】
磯繁殖期:5月~8月
殻高:10~20mm

海岸の潮間帯上部の岩躑躅(がんれき)地、コンクリート人工物などに見られ、卵巣(らんのう)からは幼貝(ようがい)が出てきます。寿命(じゅみょう)は3年くらいです。

4 イシマキガイ

【生息場所】
磯・川繁殖期:4月~8月
殻高:20mm

殻の頂上(ちょうじょう)部が河川水にとけてボロボロになります。直径1~2mmの卵塊(らんかい)をうみつけます。岩石についた小さな藻類(そうるい)を食べます。

5 ミヤコドリ

【生息場所】
磯・川繁殖期:5月~8月
殻高:10~20mm

元はオレンジ色ですが、硫化鉄(りゆうかてつ)がついて黒くなっている個体も多いです。軟体(なんたい)部は赤色で、殻(から)のふちに多数の突起(とつき)を出します。

6 フトヘナタリ(左:シマヘナタリ)

【生息場所】
川繁殖期:6月~9月
殻高:30~35mm

殻には等間隔(とうかんく)に縦肋(じゆろうく)がならび、殻口(かくこう)の前縁(ぜんえん)は伸び、外唇(がいしん)は肥厚(ひこう)します。殻(から)表面は茶かっ色(さいしょく)によって彩色(さいしょく)されています。

7 オカミミガイ

【生息場所】
川・汽水域繁殖期:5月~7月の大潮
殻高:40mm、殻径:25mm

海岸性の貝ですが、水中に入ることはほとんどありません。アシ原(あしはら)にいますが、活動期はアシ原からはい出でます。

8 マルタニシ

【生息場所】
田んぼ・川繁殖期:5月~7月
殻高:60mm

平野部の水田や用水路に多く生息します。用水路のコンクリート化により生息環境が悪化し、絶滅(ぜつめつ)した生息地もあります。

9 タケノコカワニナ

【生息場所】
川・汽水域繁殖期:4月~7月
殻長:60mm、殻径:23mm

カワニナに似ていますが、より大型で細長く直線的な形をしていて区別ができます。カワニナは卵胎生(らんたいせい)で稚貝(ちがい)をうみますが、この貝は卵生(らんせい)で卵(おう)をうみます。

10 モノアラガイ(右:ヒメモノアラガイ)

【生息場所】
田んぼ・池繁殖期:6月ごろ
殻高:20mm

石につけた藻類などを食べた後がきれいにみえ、物洗貝と名がついています。雌雄(しゆう)同体で他の個体と交尾(こうび)し、卵(おう)を水草や石などにうみつけます。

11 ヤマトシジミ

【生息場所】
川・汽水域繁殖期:主に6月~9月
殻長:5mm(1年)、18mm(4年)

ヤマトシジミはうすい塩分のある水域を好みます。入水管から水を吸いこみ、ただよっている植物プランクトンなどを食べています。

12 キセルガイ類

【生息場所】
林・草原・山繁殖期:主に6月~9月
殻長:2~3mm

殻はキセルに似て細長く、巻貝として珍しく大部分が左巻(まき)です。カタツムリの仲間で、日本に約200種類あります。

岩石

絶滅危惧ⅠA類
EW
CR
EN
VU
NT
DD
LP
絶滅のおそれのある地域個体群

1 無斑晶流紋岩



2 角閃石安山岩



3 輝石安山岩



大野川上流域から流れてきた、祖母傾(そばかたむき)火山岩類の一つです。特徴的な流紋があり、斑晶がないことも特徴のひとつです。このれきがあると大野川の堆積物(たいせきぶつ)だと推定(すいてい)できます。

4 花崗岩



下矢ノ原(したやのばる)から荷尾杵(おき)にかけて見られます。白っぽい長石とどうめいな石英(せきえい)が多く、黒雲母(くろうんも)が非常に少ないです。

7 閃綠岩



七瀬川・大野川流域のれきに見られます。白色部分は長石、黒い部分は主として角閃石から成り、輝石類の有色鉱物もふくまれます。

10 溶結凝灰岩



9万年前の阿蘇(あそ)の大噴火(だいふんか)で生じた火山碎屑物(かざんさいせつぶつ)が溶結(ようけつ)してできた岩石です。永興(りょうご)や吉野、野津原などで見つかってきました。

8 斑纈岩



大野川流域のれきにまじって、まれに採石できます。全体的に黒く、かんらん石、輝石、角閃石の有色鉱物から成ります。非常にかたい岩石です。

11 角閃石



安山岩、玄武岩(げんぶがん)などの黒っぽい火成岩が地下深くで高温・高圧の作用を受けてできる変成岩の岩石です。野津原地域には比較的(ひかくてき)多く見られます。

C 大分市内を流れる大野川流域・七瀬川流域のれき・佐賀関(ささら)に、高崎山の角閃石安山岩(かくせんせきあんざんがん)、

がのせき) 半島の三波川変成岩(さんばがわへんせいがん)を主にのせました。

野津原(のつはる) 地域に見られるめずらしい岩石をのせています。

13 竹葉石



七瀬川流域で見られます。県下では、この地域だけのめずらしい岩石であり、地元では笹目石(ささめいし)や笹石(ささい)とも言われています。黒い部分は蛇紋岩(じやもんがん)です。

14 塩基性片岩



三波川(さんばがわ)結晶片岩で、緑色片岩と言われていました。緑泥石(りょくいでいせき)や緑れん石、角閃石(さかいし)などのが主な構成鉱物です。片理(へんり)の発達が強いです。

15 でい質片岩



三波川結晶片岩。原岩は泥岩(でいがん)で、石墨(せきばく)や石英などが主な構成鉱物です。片理(へんり)の発達が強いです。

16 砂質片岩



三波川結晶片岩や泥質(でいしつ)片岩に比べると片理の発達が弱いです。緑泥石や緑れん石、角閃石、綿雲母(きぬうんも)などが主な構成鉱物です。

17 石灰質片岩



高島(たかしま)や関崎(せきざき)台下海岸、福水(ふくみず)海岸で見られます。白っぽい岩石で、まれに緑泥石をふくみ、片理にそって割れやすいです。

18 ロジン岩



佐賀関の海岸で採石されます。蛇紋岩化作用で生じるカルシウムに富んだ長石や透輝石(とうきせき)などの鉱物をふくみます。県下でもまれな岩石です。

19 片麻岩



七瀬川流域で採石されます。へんま岩特有の縞状構造(しまじょうこうぞう)と、白雲母(しろうんも)などの構成鉱物が見られます。

20 れき岩



様々な岩石が固まってできた岩石です。七瀬川流域のれき岩は、赤かっ色が多く、大野川流域のれき岩は原岩の色をしめす物が多いです。

21 砂岩



大野川や河原内(かわらうち)、七瀬川流域に見られます。河原内流域の砂岩はかたく、建設用に利用されています。

22 泥岩



大野川流域のれき。黒くて緻密(ちみつ)でかたいことが特徴です。層理(そうり)にそって割れやすく、まれにイノセラムなどの貝化石をふくみます。

23 シルト



砂より小さく、ねん土より大きい粒子(りゆうし)が固まってできた堆積岩(たいせきがん)です。大分層群中(そうぐんちゅう)に多く見られ、露頭(ろとう)によってはケイソウや、木の葉の化石をふくみます。

24 チャート



放散虫(ほうさんちゅう)などのホネや殻(がら)が海底につもつてできた堆積岩のこと、けい酸分が多くとてもかたいことが特徴です。赤かっ色や白色、緑色の岩石があります。

特定外来生物

絶滅

EX

野生絶滅

EW

絶滅危惧Ⅰ類

CR

絶滅危惧Ⅱ類

EN

絶滅危惧Ⅲ類

VU

準絶滅危惧

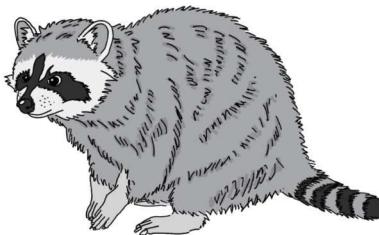
NT

情報不足

DD

絶滅のおそれのある地域個体群

LP



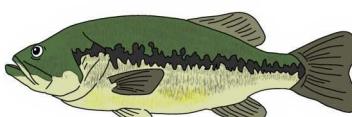
アライグマ

アニメの影響(えいきょう)でアメリカから輸入され飼育する人が増えましたが、人になつくことがありますでした。そのため日本中の森に逃がされ、増えてしまいました。雑食性で動くものを何度もまえて食べてしまうため、オオイタサンショウウオなど在来の両生、は虫類、昆虫などが減ってしまいます。トウモロコシやスイカ、ブドウなど甘い農作物も食べてしまいます。



セアカゴケグモ

オーストラリア原産で海外からの輸入木材やコンテナに付着して日本に移入されました。メスには毒がありますが、おとなしい性格なので、素手(すで)でさわったり、おしゃりでふんだりして強い刺激(しげき)を与えなければ、かれたりしません。自動車や自転車、植木ばちなどに付着して移動します。



オオクチバス

スポーツフィッシングの対象魚としてアメリカから日本に移入されました。つり人や事業者が積極的にため池や湖沼(こしょう)に移動したため、日本全国に生息(せいそく)域が拡大しました。在来の小型の魚や水生昆虫、甲殻(こうかく)類など何でも食べてしまいます。

オオキンケイギク

アメリカから導入され、緑化や観賞用に流通しました。宿根草で株(かぶ)は年々大きくなり、種子でも増えます。花の咲(さく)く時期は5~7月。繁殖(はんしょく)力が強く、成長が速いので一気に周辺に広がって、ほのかの在来の植物の生育環境をうばってしまいます。



ナガエルルノゲイトウ

アクアリウムの水草として南アメリカから導入。数センチのくさの断片(だんぺん)からでも再生する強い繁殖力を持っています。直径15mmほどの白い球状の花を咲かせ、1~4cmの花柄(かへい)があります。ため池や水田だけではなく陸地にも繁茂(はんも)します。ため池や水路で繁茂して水面をおおうことで水質の悪化を引き起こし、在来の魚類に影響を与えます。また田んぼに入り繁茂すると、稻の生育をさまたげ、収穫(しゅうかく)ができるなくなることがあります。



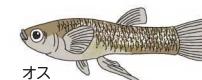
ソウシチョウ



ガビチョウ

ソウシチョウ・ガビチョウ

姿が美しく、よく鳴くことから観賞用として中国や東南アジアから輸入され飼育されてきました。鳴き声がうるさすぎることで野外に放され、繁殖してしまいました。在来のウグイスやメジロのすみかやエサをうばってしまいます。特定外来生物に指定された現在でも、知らずに違法(ひこう)飼育されていることがあります。



カダヤシ

名前の通り蚊(か)の幼虫であるボウフラを駆除(くじょ)するためにアメリカから移入されました。卵(たまご)ではなく直接仔魚(しげよ)をうめため、繁殖に水草を必要としません。在来のメダカは卵や仔魚をカダヤシに食べられてしまい、数が減ってしまいます。



ウシガエル

アメリカから食用として輸入されましたが、日本では食文化として受け入れられず、養殖(ようしょく)場から逃げた個体が野生化してしまいました。肉食の大食漢(たいしょくかん)で、水中では魚類や水生昆虫を、陸上でも昆虫や節足(せっそく)動物をつかまえて食べてしまいます。動くものを手当たり次第に食べてしまふため、在来の魚、昆虫、は虫、両生類が減ってしまいます。

イラスト:泉 海翔

特定外来生物とは、日本に海外から移入された外来生物の中で、指定したものです。現在日本においては159種類の動植物が特

在来生態(せいたい)系や産業への被害(ひがい)が著(いちじる)しく大きい種について、移動や飼養を制限するために定外来生物に指定されています[令和5年9月1日時点]。大分市ではそのうち19種類が確認(かくにん)されています。

ミシシッピアカミミガメ

子ガメがミドリガメという名前でペットとして日本全国で流通。寿命(じゅみょう)が最大で40年と長いため、飼いきれなくなり、ため池や河川に放流され野生化しました。雑食性で水草やエビ、カニ、魚類を食べるため、在来の動植物に直接影響を与えるほか、二ホンイシガメと競合(きょうごう)してすみかをうばってしまいます。レンコンやジョンサイなどの農作物も食べてしまいます。



アメリカザリガニ

ウサギエルのエサとして移入されました。養殖の衰退(すいたい)とともに放棄(ほうき)され、野外繁殖してしまいました。きたない水路などでも生きることができます。雑食性で水草から魚、昆虫、甲殻類など何でも食べてしまいます。また、在来の二ホンザリガニのすみかをうばってしまいます。



【その他に大分市で確認されている特定外来生物】

[哺乳類] クリハラリス **[魚類]** ブルーギル **[昆蟲類]** ツマアカスズメバチ
[植物] ブラジルチドメグサ、アレチウリ、オオフサモ、オオカワヂシャ、オオハンゴンソウ

条件付特定外来生物とは

2023年6月、アカミミガメ(ミシシッピアカミミガメ、キバラガメ、カンバーランドキミミガメ)とアメリカザリガニが“条件付”特定外来生物に指定されました。現在、アカミミガメは野性下に800万匹生息していると推定(すいてい)され、160万匹がペットとして飼育されています。アメリカザリガニは600万匹が飼育され、全都道府県で野生化が認め(みと)められています。このように日本全国で広く生息し、飼育されている種が“条件付”特定外来生物に指定されたのは、両種が日本の在来生態系に与える影響がとても大きく、これ以上野外への放出を見過(かんか)できない状況にあるためです。これらの動物を飼育している人は、命を全(まつと)うするまで責任をもって飼育を継続(けいぞく)してください。飼い主個人の様々な事情により飼育しきれなくなった場合でも、決して野外に放出してはいけません。代わりに飼育してくれる新しい飼い主をさがす努力を惜(お)しまないとください。どうしても新しい飼い主が見つからない場合は、飼い主個人で殺処分(さつしょぶん)を検討(けんとう)する必要性も出てきます。

日本における外来生物の野外での繁殖・増加の一因は、「飼育しきれなくなり、殺処分(せっそく)する」行動です。いったん飼育をはじめたら野外に放すことは法律で禁止されています。アカミミガメやアメリカザリガニを飼っている人は、飼いはじめた日の気持ち、好奇心(こうきしん)いっぱいの目で泳いでいる姿やエサを食べる姿を見つめた時の気持ちを忘れないでください。

条件付特定外来生物 Q & A

アカミミガメ・アメリカザリガニは現在のところ、“条件付”特定外来生物であるため、他の特定外来生物では規制されることの一部が、当面の間規制がかかりません。以下のQ&Aを参考してください。

Q 条件付特定外来生物に指定される以前より飼育しているアカミミガメ・アメリカザリガニを飼育し続けるために許可が必要?

A 許可是必要ありません。にげ出さないように対策(たいさく)をしたうえで、寿命をむかえるまで大切に飼育してください。

Q 野外から新しくアカミミガメ・アメリカザリガニをつかまえて飼育してもいい?

A 新しく飼育することに制限はありませんが、アカミミガメの寿命は最も40年、アメリカザリガニは5年と言われています。最後まで責任をもって飼育できるかよく考えてから持つて帰りましょう。一度家に持ち帰った個体は、家族の反対にあったからという理由などで、つかまえた場所に戻すことはできません。

Q 今現在飼育しているアカミミガメ・アメリカザリガニを繁殖させてもいい?

A 繁殖させることに規制はありませんが、増えすぎたからといって野外に放出することはできません。生まれた個体も寿命を終えるまで責任をもって飼育する必要があります。

Q アメリカザリガニを食べる目的で、泥(どろ)ぬきするために生きたまま持ち帰ってもいい?

A はんぶ(不特定多数に広く配ること)や販売を目的として生きたまま持ち帰ることは禁止ですが、食べることを目的として、生きたまま持ち帰ることは規制されません。

MEMO



●執筆・編集 大分市自然環境調査検討委員会
大分市環境部環境対策課

大分市自然環境調査検討委員 永野 昌博 〈爬虫類／P31・監修〉
瀬口三樹弘 〈植物／P19～22〉
三宅 武 〈昆虫／P23～26〉
谷上 和年 〈鳥類／P29～30〉
日野 勝徳 〈両生類／P32〉
松尾 敏生 〈魚類・甲殻類・貝類／P33～36〉
山田 俊治 〈岩石／P37～38〉
元大分市自然環境調査検討委員 須股 博信 〈フィールドストーリー／P7～18〉

大分市環境対策課 島田健一郎 〈哺乳類／P27～28・
特定外来生物／P39～40〉
泉 海翔 〈イラスト・編集〉

大分市身近な自然ガイドブック 2024年(令和6年)3月発行

編集 大分市自然環境調査検討委員会
大分市環境部環境対策課
発行 大分市環境部環境対策課
印刷 小野高速印刷株式会社

本ガイドブックに収録している写真・文については著作者からの了解を得て
提供いただいたものです。著作権法上認められた行為を除き、
著作者に無断で引用・複製することはできません。